

伊勢信仰と神宮

中西正己*

伊勢神宮の最大の神事、第62回式年遷宮が2013年10月に行われます。2013年1月5日(土)に開催された京都化学者クラブの新春賀詞交歓会でも式年遷宮が話題になりました。この分野では全くの素人ですが、伊勢の地に生まれた一人として伊勢神宮について知るところを紹介させていただきます。

伊勢信仰

神宮皇学館を卒業後、民俗学を研究され京都市無形文化財研究の会長を歴任された井上頼壽氏は、「伊勢信仰と民俗」(1955)の中で「伊勢の信仰として広く国民の崇敬したのは国民の九分を占める農民の農業上(主に稲作)に幸を垂れ給う信仰であった。農民は朝起きると太陽を拝してお伊勢様を敬い、正月の**歙初め**をはじめとして**穂漬け**や**初蒔き**にお伊勢様のお札を祭る。田植えが終われば氏神に苗を上げ氏神を通して大神宮に報告し、穂ができれば一本の竹を田に立てその上に穂を括ってお伊勢様に捧げる処もある。刈り終わると新しい箕に穂を載せて**鎌納め**の祭りをし、農具を全部収めるとは**し納め**の祭りをする」と述べています。

伊勢の地には、天照大神が祀られる前から人々の生活があり、多くの神々が祀られていました。朝廷は、天照大神を鎮座させるため古くから祀られていた神々を追い払うことはしませんでした。神宮を構成する摂社や末社は、もとより伊勢の地に祀られていた神々です。

註：朝廷の大神、天照大神の祀られている「内宮」は「内の宮」であり、内輪(特に皇室)だけの宮ですが、「外宮」は「外部の氏人にも広く参拝奉幣させてよい宮」を意味します。

伊勢神宮

伊勢神宮の正式名は、「神宮」です。神宮は、**皇大神宮**(内宮)と**豊受大神宮**(外宮)の両正宮を中心に、14所の別宮、109所の摂社、末社、所管社から成り立っています。内宮にはあらゆる命を育む太陽にも例えられる天照大神が祀られ、外宮にはお米をはじめ衣食住すべての恵みの守護神とされる豊受大神が祀られています。神宮を構成する125の宮社は、「自然は恵みを与えてくれるが、一方では恐ろしい畏敬すべき対象である」という考えを基本に祀られています。自然の恵みは、神宮の衣食住の自給自足に繋がっています。

大神の御霊には、柔和で穏やかな徳を備える**和御魂**(にぎみたま)と荒々しく活発な徳を備える**荒御霊**(あらみたま)の二つがあります。和御魂は「正宮」に、天照大神の荒御霊は荒祭宮別宮(内宮)に、豊受大神の荒御霊は多賀宮別宮(外宮)にそれぞれ祀られています。

伊勢神宮には、注連縄、狛犬、鈴、おみくじがありません。また他の神社でみられるような賽銭箱もありません。神宮は、古くから天皇のみが奉幣でき「私幣禁断」でした。今もこの名残があり賽銭箱には白布が敷かれています。参

*京都大学名誉教授

拝は外宮にお参りした後、内宮にお参りするの
が習慣になっています。

神宮の杜—宮域林—

神宮は、伊勢市の4分の1に相当する55km²
の宮域林（琵琶湖南湖盆—57km²—にほぼ等し
い面積）を有しています。古くはすべてが自然
林でしたが、現在の宮域林は自然林（25km²）
と神宮の御用材である檜や水源涵養のために在
来の広葉樹などを植栽した860種に及ぶ植生豊
かな混交林（30km²）から成り立っています。
静けさの中に広がる宮域林は絶えず清らかな水
を五十鈴川にもたらしています。

自然林を残し、混交林の育成に力を入れた背
景には、江戸時代、頻繁に起こった洪水被害に
あります。江戸時代におかげ参りが全国に広ま
り年間400万人（当時の日本人口はおおよそ3,000
万人）が伊勢に集まりました。参拝者の接待に
必要な薪や炭不足を補うために宮域林の樹木
も伐採され、宮域林は「裸の杜」と化しまし
た。その結果、大雨毎に洪水が起きました。
この退廃した宮域林の再生を目指して、造林が
1922年（大正11年）に三好学（植物生理・生
態学者）ら研究者を中心に行われました。御用
材である檜や杉に加えて伊勢に自生する多様な
樹種を植栽することにより自然林のもつ生物多
様性・水源涵養など生態系機能を復元させ現在
に至っています。

125の宮社が建て替えられる式年遷宮で使わ
れる御用材として宮域林に植栽された樹齢80
年の檜は、直径60cmを超え第62回式年遷宮で
2,500本ほどが使われました（式年遷宮で使わ
れる御用材は直径100cmを超える樹齢200年以
上の巨木を含めておおよそ12,000本）。宮域林で
育った御用材が式年遷宮で使われたのは鎌倉時
代以来初めてのことです。江戸時代から1993

年に斎行された第61回式年遷宮までは、御用
材のほぼすべては木曽の国有林で調達されてき
ました。100年後の式年遷宮の御用材のすべて
を宮域林で調達できるよう「住の自給自足」を
目指しています。

註：宮社新造に使われる御用材は、式年遷宮の
8年前に伐採され、神宮の貯木池に4年ほど漬
け余分な油脂分を取り除いた後、乾燥させ宮大
工により加工されます。

神宮の歴史—天照大神・豊受大神の鎮座—

神話の時代、天照大神は高天原で手に入れた
稲穂を託し、「この鏡は私を見るがごとくに祀
れ」と孫の瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）に宝鏡
を授けました。この宝鏡が天皇家の大神を祭祀
する御神体となっています。

今からおおよそ2,000年前、第10代崇神天皇（3
世紀?）が天照大神と大和天国魂神の二神を宮
殿にお祀りしていたところ、疫病が蔓延し国民
の多くが亡くなる事態になりました。天皇は、
「両神共祭し住むことを好まず、よって天照大
神と大和天国魂神を宮殿の外に」と皇女、豊鍬
入姫命（とよすきのいりひめのみこと）に命じ、
天照大神を大和の国、三輪山の麓—笠縫邑（今
の桜井市）—に、大和天国魂神を三輪山に祀っ
たところ疫病は終息しました。その後、天照大
神は、笠縫邑から丹波（福知山市）、丹後（宮
津市）に移され豊受大神と共に祀られた後、再
び笠縫邑に戻られたという説もあります。第
11代垂仁天皇（34世紀）が即位しますと、皇
女、倭姫命（やまとひめのみこと）は天照大神
の大宮地を求め笠縫邑から伊賀の国→近江の国
→美濃の国→桑名→鈴鹿→多気などを巡り、伊
勢の五十鈴川の川上に着かれた時、天照大神の
ご神言を受け、297年?に今の神宮の地に鎮座
されたと言われています。

何故天照大神の鎮座する地を求めて旅をしたのでしょうか。大和の国は先住民族の地元信仰が根強く、外来の天皇家勢力の信仰を容易に受け入れなかったことが鎮座の地を巡る旅に繋がったという説や大和朝廷の皇威宣布のため武威によって在地土豪を服従しながら旅を続けたという説もあります。旅の途中、鎮座したと言われている地は「元伊勢」と呼ばれ、そこには「元伊勢宮」がありますが「元伊勢宮」は伝承的であり今の「神宮」とは直接繋がっていません。

その後、天照大神のお告げを受け、第21代雄略天皇(478年?)は御饌都神(みけつのかみ)として丹波の国から豊受大神を伊勢の山田原に迎えました。この宮が豊受大神宮(外宮)です。註：神宮の管理運営は、明治までは朝廷を軸とした世襲制でした。その後、世襲神職は廃止されましたが、祭主は皇族の中から選ばれ天皇に代わって奉仕し、第二次大戦まで続きました。戦後、神職に関する官制は廃止され国の管理から離れ宗教法人になりましたが明治時代に制定された職制は続いています。

神宮の祭り

神宮の祭りは国家安泰と五穀豊穡を願う祈りです。125の宮社で行われる祭りは年間1,500回を超えます。祭りは、毎年決まった日に行われる恒例祭、国家の大事にあたって行われる臨時祭、式年遷宮に伴う遷宮祭の3つに大別されます。祭りの多くは、稲の種蒔きにはじまり、田植え、収穫を通して自然の恵みに感謝する祭りです。恒例祭の代表的な祭りは、宮中の儀式作法により皇室をはじめ世界の平安を祈願し6月と12月に行われる月次祭(つきなみさい)と収穫された稲穂を天照大神に奉り自然の恵みに感謝し、神事で用いる祭器を新しくし神の生

命の更新を祈願する神嘗祭(かんなめさい)です(10月)。神嘗祭は最大の祭りで伊勢の正月と言われています。20年に一度の式年遷宮は、大神嘗祭とも呼ばれています。

神宮の祭祀の基本は、毎日行われる日別朝夕御饌祭(ひごとあさゆうおおみけさい)です。外宮の御饌殿で1日朝と夕の2度、1,500年間欠かさず行われてきた祭りです。お供えする神饌(しんせん)は、ご飯・塩・水・鰹節・鯛・海草・果物・お酒です。

お供えは、海産物を除きすべて自給自足です。

式年遷宮

式年遷宮は、定まった年に行う遷宮という意味です。

律令制度の改革を進め、天皇中心の中央集権的国家づくりに努めた第41代天武天皇が式年遷宮制度の発案者であると言われています。

第1回式年遷宮は、天武天皇の意志を継ぎ、皇后であった第42代持統天皇によって690年に皇大神宮、692年に豊受大神宮の遷宮が行われました。式年遷宮は、奈良—平安時代まで問題なく継続されましたが、その後は、財政的な問題を抱えながらの苦難の中で行われました。南北朝—室町時代に入りますと応仁の乱など世の乱れが続き100年以上も遷宮が中止されました。その時、伊勢の地にあった臨濟宗の尼寺の慶光院上人と呼ばれた尼僧が諸国を巡り、一般市民から浄財を集め式年遷宮の復興に貢献されました(1,500年後半には、織田信長や豊臣秀吉からも寄進を受けたと言われています)。江戸時代になると徳川幕府(1671年)が遷宮経費として3万石を寄進したこともあり、再び式年遷宮が20年毎に行われるようになりました。明治維新後、式年遷宮は国家の経費で実施され

ますが、経費削減のため式年遷宮コンクリート論も話題になりました。第二次大戦後は、国家から離れ宗教法人に移行したため、式年遷宮は一般崇敬者からの寄進によって行われています。2013年に行われました第62回式年遷宮ではおよそ550億円の経費がかかったそうです(1993年の第61回式年遷宮は、約330億円)。

式年遷宮は何故20年毎に行われるかという本当の理由は不明ですが、説として以下のような理由が挙げられています。「常しえに若々しく未来永劫」をキーワードに、1)新鮮さを保つ社殿の限度が20年(屋根の萱が苔生し新鮮さを失うなど)、2)建築技術や神宝の作製技術を継承するには20年が限度であることや3)唯一神明造り社殿の建築様式が弥生時代の稲穂を保存した穀倉をモデルとしており、稲穂の最長貯蔵年限が20年という法令を理由に挙げている研究者もおられます。

式年遷宮では、その8年前から御用材の御木曳にはじまり、社殿の横地に新宮を建て714種、1576点におよぶ御装束(社殿内外を飾る布など)、神宝(機・楽器・硯・武具・馬具・日常品など)神々の御用に供えるすべての調度品が新調されます。

社殿—唯一神明造り—

唯一神明造りと言われている神宮の社殿建築は、お米を収める弥生時代の高床式倉庫を起源とし、礎石のない掘立柱(ほったてばしら)と萱(かや)の屋根を特徴とした総檜の素木造り(しらきつくり)で直線を主体にし、飾り金物以外に何も無い簡素な建物です。

唯一神明造りの特徴を下に列記します(写真1参照)。

1. 柱は丸柱で直接地中に埋め建てられている掘立式の建築です(天と地を柱で繋ぐ)。

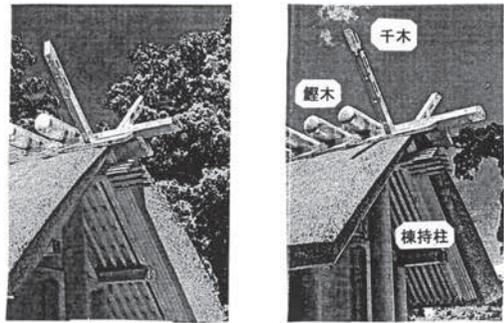


写真1 豊受大神宮(外宮)と皇大神宮(内宮)の屋根の形
(神宮司庁、1986年の写真の一部を転写)

2. 屋根は萱葺で切り妻つくりの平入りです。
3. 屋根の両妻にある破風(はふ)が延びて屋根を貫き千木(ちぎ)となっています。外宮の千木の先端は地面に対して垂直(外削り)ですが、内宮のそれは地面に対して平行(内削り)になっています。
4. 棟の上には鯉木(かつおぎ)が並べてあります。重石の役割をしています。外宮の正殿の鯉木は9本ですが、内宮のそれは10本です(奇数の鯉木は男神を、偶数の鯉木は女神であることを表わしています。外宮と内宮の千木の先端の違いも神の性と関係しているようです)。
5. 棟の両端には直径100cm以上の太い棟持柱(むなもちばしら)があり、正殿を支えています。
6. 建物の構造は、すべてが直線的で飾り金物は最小限に留め装飾や彩色のない素木造りになっています。

註：社殿の御用材は60年を耐久年数と定め再利用されています。例えば、外宮の棟持柱は内宮の宇治橋の外側の鳥居に、内宮の棟持柱は宇治橋に内側の鳥居に再利用され、更に20年後には宇治橋の鳥居は全国の神社の鳥居の御用材として再々利用されます。

伊勢市内には神宮に関する資料館として、神宮
徴古館、神宮農業館、神宮美術館、せんぐう館
があります（多気郡明和町には、齋宮歴史博物
館があります）。

参考文献

井上頼壽（1955）：伊勢信仰と民俗，神宮司廳
指導部，271pp.
金森早苗編（2012）：伊勢神宮，JTB パブリッ
シング，143pp.

櫻井勝之進（1969）：伊勢神宮，学生社，
251pp.

神宮司庁（1986）：神宮，神宮司庁，156pp.

中山伊知郎ほか（1963）：日本のふるさと伊勢，
広済堂出版，419pp.

浜田恒男（2013）：伊勢人・物・事・そして自然，
（株）アイブレーション，194pp.

茂木貞純（2012）：知識ゼロからの伊勢神宮入門，
幻冬舎，175pp.